

甲辰初冬從軍過大石橋憶孤景坪内君賦此

恒堂 前田多藏

處々新墳衰草中。當時想見血痕紅。揮刀挺進君安在。空指
荒邨泣曉風。

再過大石橋

幽明相隔夢耶眞。邊淚潛々獨濕巾。大石橋頭風雪惡。慙慙
未掃墓前塵。

〔三七六〕

黃泉郵便

〔三七七〕

こは亡友坪内孤景君に代つて君が戦死當時の状況を書いたもので、併せて余
が慰藉の情を寓せたものである。

薄田 斬雲

(上)

僕は好んで酒を飲む、飲めば酔ふて必ず下手な踊をする、何時かは酒樓の姐さん
に「貴方のように、のべつ踊つては奥様が可憫相です、お衣裳が堪りません」と配
慮に預かつたこともある。愈よ召集令状が來さうだと云ふので、知友一同寫眞を
撮つた日の晩、孤島君の宅で、一同大に飲んだ果てには、僕、四百餘州……を三時間打
つ通しに踊つたので、翌日は疲勞れて一日臥て居た、之れが抑も僕の踊收めであつ
た。

何處へ銃丸が中つたと問はれても、憚んな骸骨になつては、僕自身も何處だか解
らない。何でも、下腹部へ、千丈も高い斷崖から眞直ぐに落ちて來た大石が、骨灰に

なれと打つかつた様に、うんと言つた限り、グラ／＼と僕は一支もなく倒れて死んで了つたのだ。一體大石橋の夜襲と云ふのは随分無理な行動で、敵味方の區別も容易でない眞黒闇を、有鐵砲で待構へて居る敵壘へ此方は盲滅法で突貫するのだから、晝の戦と異つて、何が恐いともなく、妙な凄味があつて、頭の邊を死神が徘徊ふて居る氣持さ何だかモウ地獄へでも行つて居る様でね。夫ア君等が川鐵で臙物持つて來い、お爛は熱いところなど、大熱になつて突き當りのお梅の小間物屋へ縁日の夜襲する様なのは違ふ、額へ冷汗が浸潤んで、總身粟が立つて居たんだ。夫を夫れ、露助の銃丸と云ふのは一體が卑怯だよ、ズドンとも、ヒューとも云はず、黒闇から窺り飛んで來て、ズブリ臙腑を刺つたのだから、僕は文士だと言つて除ける暇もなかりけり露助が射ち出す闇の夜の銃丸位に洒落て置かう。

其の當時、新聞紙へ出た戦死者姓名の中へ、僕の名は記されなかつた、唯だ、外に氏名不詳將校一名と出て居た。處が僕が郷家や知友に送つた手紙は、丁度、其の日に配達になつたので、友人等は、僕が又々惡運強く死を免れたものと思つて居たらしい。戦死四日前に孤島君へ送つた葉書などは一月經て配達になつたので、死せる

〔三七八〕

孤島生ける孤島を訪ふなど、洒落た人もあつた。

〔三七九〕

扱て僕は、骸骨に金鷄勳章と旭日章を燦然と飾り掛けて三十日許りの船路陸路の旅を終へて東京へ歸つて來た。昨、出征の日には綿入服にマントを着て、寒い／＼で居た人々は今や酷熱堪へがたいと言つて汗を拭き切れない様さ。新橋で氷水を飲まうと思つたが、唇が無いから我慢した。俵の上から白木の箱を透して、ピアホールを眺め上げたが、涎が流れないので、をかしいと思つたら、舌も咽喉もないのに氣が付いて、ガッカリした。

僕の眞實の郷地は、名古屋であつて、僕は名古屋師團所屬だから、名古屋で葬式を行ふと、一大隊とかの儀仗兵を供せらるゝと云ふ話もあつたが、こんな四角張た骸骨へそんな几帳面な供物を配合せられては、彼奴は文士の癖に、テーストがないなど、閻魔大王のお覺も案せらるゝので、いつその事、知己親友等に送られ、泌りした行列を人間到處青山有と、練つて行つた方が餘程風流だと思ひ直して、青山へ新しい墓標を建てる事にした。

葬式の前夜、叔父の宅へ親しかつた友等が六七人泊つて居て、眞夜中過迄大騒を

して居るので、僕も寝付かれぬ儘、此の世の名残りにもと思つて、窃ツと宙乗りをして行ツて、障子の外から覗いて見ると、居るわく、例の大將連、飲助、喰助、饒舌助、黙助など、横になり、仰向になり、のたくり、倚り掛り、茶腹、酒腹、菓子腹などを名々に一ツ宛抱へて、三人で一斗三升飲んだ奴があると、一方で云ふと、此方では、いや俺れは二人で毎夜六升宛十日も連飲したと云ふ、いや酒などは水も同じだ、第一が不經濟だ、夏は焼酎に限る、七錢の品一合あると十分だと云ふ。夫れぢや貴様の口へマツチを擦るとポツ／＼と火が炎えるだらうと、何れ強者共の口に黄色い焰を舉げて壯なものだ。僕話を聞いた丈けで、ふら／＼に酔うて了ツて八百八街を宙を切ツて夜明迄廻はり歩いて涼しい夜風に吹かれた。

(下)

愈よ夜が明け放れた。平生は犬も滅多に通らない大久保へ、朝まだきから軋り響く俥轍の音は、我を迎ふる天樂の様に聞き做されて、僕は浮立つ様な氣さ。だが、今日からは、生前、有る、無しさへ疑問であつた神様に一足飛びに仲間入りをするのだから、静として見て居ると、白や、青や、茶などの直衣を着た神主さん達が、随分と丁

(三八〇)

(三八一)

寧な、所謂莊嚴な御祭をして呉れて、御馳走などは山程有つた。彼の葡萄の一房でも戦地で得られたのなら何んなに甘く味はつたらうと感懐措き難かつた。廳て七時半に僕は柩に乗ツて眞の親友八九人に兩側に付いて貰ツて幾百人の會衆に送られて、堂々と行列を繰り出した。途中小路の角々へ立つて見送つて居る近所の人達が丁寧に頭を下げて呉れた時には、僕始め柩側の友等が眞實感涙に咽んだ。廳て、青山に着いて、僕は祭場に安置され、右側には一般會葬者が着席し、左側には一族親友等が着席した。右側に居る大きな頭の人達は、椅子に馴れない、非文明人かして、大分行儀が、いや、居苦るしさうだつた。

又も茲で御祭が始まつて、僕は愈よ神様らしくなつた。神主さんが祭文を読み上げる時、同明治三十六年何々と書いたのを、オヤジクミョウヂ何々と繰返し／＼オヤジことをオヤジ様に讀んだので、今では同人間の話柄になつて居る。

祭の式が終ツて、愈よ墓地へ行つた時には、今朝からポツ／＼して居た雨が覆したと云ふ様にどしや降りになつたので、一般會葬の方には左程でもなかつたらうが、墓標を建てて居る迄居て呉れた諸君は、借りて來た人もある袴羽織を雫が垂る迄濡

らして、何とも御氣の毒だった。併し僕がこんな御面倒に預るのも之れが最終だらうから勘辨して呉れたまへ。

「僕は、今頃何處に何うして居るだらう」などと、口へ出しては言はぬながらに、君等の中には折節心の中に考へ込む人も、一人二人はありさうだから、一寸、近況を報告致さう。

附

僕は、今や、時間空間の範疇を超越して至らざる處なく、及ばざる處なく、情もなく、欲もなく、空々寂々の境地に居る。夫れで神様丈けに神通の自在力があつて、山川草木、禽獸虫魚などの森羅萬象を唯、等並に見て生きてるでもなく、死んでるでもなく、唯だ澄然として真如の月を心として居る状態さ。戦争のお蔭で、文士と云ふ仲間、食ふに事を缺いて居ると云ふ話だが、土夢、食ふなど云ふ事は、意地汚ない話でね、僕などは食ふの飲むのと云ふ、餘計な事は全く要らないんだから豪いさ。君等にもズツと凌ぎ良くなる法を傳授仕ようかとも思ふが、併しそんな慈悲善根も來世の爲など考へる娑婆生活時代の事で、此地はそれ人間等しなみに遂ひには歸すると云ふドン詰りの白骨界だから、君等の世を維持して居る法律と同じ事に、已

〔三八二〕

録

往に遡って血腥い娑婆世界の世話を焼く事は止しに仕よう。

〔三八三〕

今では、肉も皮もない、身動きでも仕よう者なら、骨が一堪りもなく、てん／＼ばら／＼に崩解れさうだから、折角好きな踊りも差控へて、手持無沙汰に静として居るのだがね。夫れでも、過日、同級の親友等が集って追悼會とも付かず、慰問會も妙でない、まア何にとも名は無しに、僕の父と叔父を招いて、僕に對する死後の志を盡したいと言つて、宴會を開いて呉れた時、紀念の寫眞を撮つたが、僕は生前の寫眞を名代に立て、一所に撮影したのは頗る妙であつた。其の席上で護國寺に居る坊さんの友が、佛式で、床の間へ飾られた僕の寫眞へ回向を手向け讀經して呉れたが、僕、眞言宗の御經を聞くのは始めてであつたので、少々面喰つたと云ふのは、讀むのが早くて、文句が聞き取れないし、夫れに諸佛尊の名を呼びかけたらしいのが、博文館だ、富山房だ、金港堂だ、春陽堂だ、隆文館だ、有朋堂だ、嵩山堂だ、今に破産だ、身代限だ。日本銀行、三井銀行、東海銀行、京濱銀行、勸業銀行、百一銀行、百三銀行、百八銀行、何處へ行つても、只は金呉れぬ。ても扱ても涙々々佛と様に聞こえたので、僕頭を外すまいと、一生懸命で齒を喰べめたよ。之れが黃泉へ來てからの初笑だった。

此の廿四日には文學會で僕の追悼を兼ねて大長廣舌會を開くと云ふ事で、餘興には假裝會があると云ふから、僕も夫れまでに、骨をそっくり鐵條てつじょうで繋いで貰って、一ツ骸骨踊と云ふのを、遼陽占領の圖を染め抜いた浴衣へ、白足袋、白袴の拵で、思ふさま踊ってやらうと、今から氣が急かされてねー（九月十一日記す）

その後御變りもなく候や小生無事、本月に入りては蓋平占領の戦闘に加はり候目下當面の敵と觸接し居り日として西に東に時々銃砲の音を聽かぬとなし、かく筆とる間もちき右手の方にあたりて一齊射撃の音がまびすしく、小生等は寸刻も油断のひま無之候、先日瀧田君の許へ山鳥の尾のまだり尾のと書き送りぬ悉しくはそれにて御承知下されたく候、郵便が出るのとゆゑ匆々一筆如斯候前哨線なる森林中の幕營内にて

七月廿日

中島茂一様

雨やう／＼晴れたる夕まぐれ
少尉 坪内銳雄

白雲

兒 玉 花 外

國も愁へよ、人も泣け、
恨は長く草深き
大石橋の戦ひに
少壯士官わが友の
命は敵弾に碎けたり。

遼東の野に砲煙たち、
詩神の裳に筆捨て、
國の賜びたる劍を執り
火蹈み、血を越え、敵を追ひ

御國の爲に殞れけり。

波も激して日の本に

悲しき報知齋ちし時

嘆きに吾や泣き伏しぬ、

神も運命も無情なる、

天をば地を呪ひにき。

今宵は月の青白う

一片光る西の雲、

故國の空へ君が魂

雲に乗りてぞ慕ひ來し、

遺骨の郷にかへるさき。

三八六

三八七

三歳早稻田の學窓に

詩筆研きし一秀才

劍は残りて人むなし、

花咲き鳥の謠ふとて

いつか聞かんや君が歌。

悲しき風に翼して

高きに消去る白雲よ

やよ待て淋しわが靈も

共に抱いゆけ涙なく――

春や露れたる天つ國。

孤景子を弔ふ

中島 孤島

得難きの縁を此の世に享けて、君と學窓を共にせしは、尙ほ昨日の如くなるに、君ははや我等を遺て、何處にか行ける。

美はしきものは脆しといふ、情厚きこと君の如く、心清きこと君の如くにして、命薄きこと如何なれば君の如きや。

君は誠に我等の光なりき、君ありて我等に誇ありき、君ありて我等に光ありき、あゝ君亡うしてまた何の誇あらん、また何の光あらん。

南山の戦終るや君が消息は語りて曰く、第一線にありて身に一彈を蒙らず、幸にして凱旋の時あらば、我れもまた願はくは我が「セヴストポール」を書かんと。我等は深く天佑の君が身にあるを信じて、是れよりまた再會の日あるを疑はざりき。疑はざりし再會の日は遂に來らずして、思はざりし凶報は突如として到りぬ。我等は君の計に接して、二たび疑ひ、三たび惑へり、我が友如何で死せんと。今にし

〔三八八〕

て尙ほ誠に君亡きを信ずること能はず。

あゝされど君は逝けり、陣中書を裁して「悪運強し」と誇りたる君が墨痕の尙ほ未だ乾かざるに、君は杳として早く聲なし。あゝ何の日か我等はまた君が「セヴストポール」を讀まん。

〔三八九〕

思ふ三月七日の夜、君が出征の門出を送りて新橋に到る。燈影星の如くにして、人は影の如く去來す。手を執つて君が前途の光榮を祝する時、歡聲湧くが如きも、同人相顧みて語なし、悄として君が後影を目送る。君は雲烟の裡に没して、また歸らず。君が征衣の姿尙ほ眼前にありて、また永へに相逢ふの期なき乎。

人生のこと固より定め難し、君が生は電の痕なきが如しと雖、君が死は誠に花の如く美はしかりき。光榮の死君に於て寧ろ憾む所なけん。

あゝされど我等が思は永へに盡きずして、君は永へに歸らず、今にして君が生前の志を思へば、恨何ぞ盡きん。願はくは誓つて君が志を空うすることなけん、願はくは君が靈の光によつて君が志の萬一を成すことを得ん。幽冥境を隔つるとも心は相通じて永へに渝ることあらじ、願はくは享けよ。

坪内孤景小傳

坪内孤景小傳

千代田城の西、青山街道を行くと殆んど半里、左折して進むと更に幾町すれば、坦々たる一條の道を挟むで、緑樹滴翠の間、古墳新塔の今尚ほ累々たるを認むべし。是れぞ名にし負ふ青山墳墓の地にして、白頭も紅顔も、乃至は英雄も佳人も、一切にこれを呑み盡して尚ほ且つ飽くを知らざる處。されど氣澄み、地いと閑にして、四邊の風物自からに一種莊嚴の景致を添ゆるは、足初めてこゝに到れる者をして、思はず敬畏の情に堪えざらしむるものあり。蓋し、此はこれ斯る境地にふさはしき特色の一なるべし。今は世に亡きわが友坪内孤景が埋骨永眠の床は、即ちこゝなる原の盡頭にあり。後には澁ヶ谷の老木の森を隔て、天際白雲の彼方に富嶽の詩神を拜し得べく、前には青葉茂れる森を通して、君が爲めには軍隊生活の搖盪たりし麻布聯隊の兵舎も、指願の間に見えつ隠れつ。曾ては君が兵營の夢を驚かせし劉曉たる喇叭の音も、今將たこゝに聞ゆめり。されど、嗚呼されど曾て快活なりしいとしき君が靈は、遠き遼東の彼方なる大石橋頭の露と消えて、今は幽冥境を異

〔三九〇〕

〔三九一〕

にし、靜に立てる一基の墓標、一痕の碑名に、過ぎし昔の名残を留めて、悲しき追憶の種となれるぞ、さてもうたてさの極みなるかな。

余の君と相知りしは、過ぎし二十九年の秋も半ばの頃かとぞ覚えし。君は當時早稻田英語專修科を出で、更に文學部に進み、稻門秀才の名噴々として獨り全校を壓したる時にてありき。此の時われは漸く田舎を出で、都に上り、都門また一人の知己あるなく、自から力めて孤獨幽棲を娛み、敢て他に友を獵るの愚を學ぶを欲せざりしが、偶然の機會は偶然の結果を生みて、われまた稻門文學部の末席を汚すこととなり、こゝに端なくも君を見出し、君と手を握つて堅く將來を約することはなれり。

坪内孤景小傳

爾來こゝに殆んど十年、時に西別東離の悲愁を呑みしとありとするも、相愛する知己の情に至つては、未だ曾て其の變りあるを見出す能はざりき。されば、世に亡き友の人物、性行、學識、若くは其の長所短所のあらゆる方面に涉りて、われは少なくとも他の多くの友に比して、其のより多くを知り得たりと信する一人也。さはれ、今紙に臨みて世に亡き友の小傳をものせんとすれば、往時の追憶一時に蝟集し來

40 りて、情迫まり胸塞り、筆の運び徒らに遅々たるを覺ゆるも、深きるに、しのあればなるべし。

* * * * *

附 君は尾州名古屋の人、姓は坪内、名は銳雄、孤景は其の號也。明治十一年六月十二日を以て同市花車町に生る。十七年同地泥江小學校に初めて初歩の教育を受け、二十年更に津島高等小學校に進み、二十四年優等を以て同校を出るや、直ちに縣立愛知中學校に進み、一飛して同輩推重の府となり、茲に漸く其の資性の凡ならざるを示せり。二十七年夏七月、同校四年の科程を終へて學に京に上るや、叔父博士坪内道遙氏の許に育はれ、同年九月を以て早稻田英語專修部に學び、同輩推重の府たること依然たり。超えて二十九年七月、主席優等を以て同科を出づるや、叔父博士道遙氏の頻に倣ひて文學を專行すべく、同年九月を以て更に文學部に進み、尙ほ獨り秀才の名を恣にせり。余の君と相知りしは、即ち此の際の事なりとす。

余の相知りし後の君は、其の人物、性行、若くば主張の上に極めて趣味多き幾變遷を來したるが如し。即ち學生時代、殊に文學部時代の君は、教師時代の君にあらず、

(三九二)

教師時代の君は、また之れ軍隊生活時代の君ならざるが如く、其の境遇と時代とに因つて、君の性格に幾進轉を來したるは事實なるが如し。乞ふわれをして今少しく君が性格幾變轉の跡を追はしめよ。

(三九三)

想ふに學生時代、殊に文學部時代の君は、資性温厚にして言に圭角なく、行に委曲なく、一見君子人の風ありしと雖も、而も中に靡すべからざる霸氣あり、犯すべからざる主張ありて、人後に落つるが如きは、君が曾て容すを敢てせざりし所。之れを以て學に文學部にあるや、主席優等の月桂冠は、常に懸つて君の肩上にありき。殊に君が資性の優厚、眞率にして、義に富み、信に敦かりしは、偶々以て一級の圓滿なる調和者となり、敵も味方も其の人と爲りに推服せざるはなかりき。蓋しこれ君が性情の他に秀れて、優にやさしく、且つ愛せらるべく生れたればならむ。

當時礫川竹早町の邊に我級梁山伯の一連ありき。其の寓を名けて寂々菴と云ひ、其の徒を呼んで非學校徒、或は酒仙黨、またの名法螺黨など仇名されつ。此の徒常に治國平天下なぞとガラにもなき空望を夢見ては、豪語快談、時事を罵り、革命を叫びつ、痛飲夜を徹するともまた一再ならざりけり。君が温厚篤實の資を以てし

て、尙ほ且つ此の一連の酒仙黨と交り、痛飲淋漓、會て一たびも後を見せたることなく、酔到り興會するに及んでは、君が無言の唇頭はいつしか泡と變じて、氣焰萬丈、人をして謙厚君の如き者また此の言を爲すかと叫ばしむることも多かりき。而も君や常に時處を忘れず、何處如何なる時にありても、必ず宅に還り去るを常とし、翌朝また必ず學に上るを例とせり。嗚呼此の一事、また以て君が非凡の性行をトするに難しとせんや。

斯くて三十二年の夏七月、文學部主席優等を以て早稻田を出づるや、此の年十二月君は去つて一年志願兵となり、われは筆を載せて雪の北海にさすらう身となりつ。こゝに少時君と相見るの機會を見出す能はずなりぬ。而も相懐ふ綿々の情に至りては更に變るとなく、雁信また常に絶えたるともあらざりき。

翌三十三年の春三月、余の北海に敗れて都に歸來し、當時閭巷の窮措大となるや、東都に於けるわが唯一慰籍の友は、實に義に富み情に敦き君にてありき。君一年志願の任滿ちて、翌三十四年の四月一日、縣立宮城縣第三中學に聘せられて任に東奥に赴くや、閭巷の窮措大たるわが此の心は、實に孤獨寂寥の感にえ堪へざるもの

ありき。蓋し相思の情の他にすぐれて増されるものありければならむ。

君、東奥古河中學にあると約二閱年、君が謙厚なる性格は、茲に多大なる變化を生みて、豪放磊落、君は頗る詩的人となれり。これ固より君が性格中の一偉要素なりしならむと雖、而も君が實踐躬行の志は、秘して以て之を敢てせざりしもの、偶、粗放雄大なる東奥の自然と、其質朴にして飾なき人文とに觸れて、茲に端なくも其本然の性を發露し來りし也。これ豈君が爲に祝すべき一大發展ならずとせんや。然りわれは君の爲にこれを嬉び、君の爲めに之を慶せざるを得ざる也。當時君東奥よりわれに書を寄せていふ、

壬寅の歳こゝに逝かんとす、壁に恥づるは覺え書き、いつの年の暮とてかわりなけれど、殊更ことしの今日此の頃の我が感慨こそいと切なれ。久しく君をはじめ在京の故人にも負きて、消息だに絶々なりし故由など、今敢て言はじ。唯われは爰に面白きこと多く、又忌々しきこと多く、勇ましきこと多く、又弱々しきこと多く、苦しきこと多かりし明治三十五年は、明かに我がHistoryの二頁として記すべき値ありしを祝し、且つ悲みて、爰に更に希望洋々たる新春を迎へんとす。

譬へば我が明治三十五年間の歴史は、西洋中世史の如し。ダーク・エイジと言はゞ言ひぬべし。されど、幸にして中世史は、歴史上より全く排除せらるゝ程に無價値にはあらざりき。されば、是れはた一面より言はゞ、ブライイト・エイジなりきといふべきか。唯夫れ暗黒時代が一面より觀て、光明時代と言はれ得る所以は、其の暗黒時代が竟に全く暗黒に終らずして、や。其の後につゞきて文運興隆、人心活動の光明時代生まれ出でたれば也。われは知る、全然の暗黒は到底いか之れを庇護していふも、光明なりと觀る能はず。全然の迷は到底如何に之れを解釋すとも、悟と評する能はず。暗黒の後に光明あれ、迷の後に悟あれ、斯くてぞ暗黒も光を放ち、迷も覺に入るべき。ア、去れよ、逝けよ明治三十五年！

是れ明かに謹厚眞率なりし君が性格の一變化を標示したる也。然り光明と暗黒、迷と悟、是れなべての詩人が到り投すべき至當の輕過點にあらずや。而して君は今正に其の原頭に立つて煩悶し、格闘し、奮戦し、而してこゝに何者かを掴み得んとしつゝあり。これ明かに君が性格の一大革新期にあらずや。然り、正に謹嚴端正なるべき教師に閉ぢて、煩悶懊惱の子たる詩人に開かんとす。われは君の爲めに

（三九六）

（三九七）

これを祝し、これを慶せざらんと欲するも能はざる也。
三十六年の三月盡日、君が東奥古河を辭して、將に京に還らんとするや、先づ一書をわれに寄せていふ。

（前略）何の因果かや、奥州に假寐の夢を結びてしより、はやく爰に二とせの月日を過ごして、つら／＼觀すれば、近頃は田舎教師もほと／＼嫌になり、何とか工夫して都の空に舞ひ戻りたく心矢の如くに候。田舎にあればとて粗放僕の如きもの、固より財を蓄ふること出来るではなし、又之れをなさんと希ふ心も今迄のところにては少しもなし。唯地方教育の經驗を得ん爲めと、東北の風物をながめん爲めとの心にて、此の地にありしが、いつの間にか日暮れ月逝き、最早こゝいで見切りつけねば、あはれ僕も多少の抱負なからずと雖も、空しく青春凋零、同人に相見ゆる顔もなからんとす。此の如くは慚愧／＼。生まれて人たるべしとも思はずと存じ候。況んや僕の老父今や僕を待つこと切りにして、僕をして一日一刻も遠く此の地にあることの没人情なるに耐えざらしむ。唯、今俄に出京せんことは、此の地學校の事務も許さざるべく、將に出京の上徒手遊食せんこ

ともいと苦しく、先づ晩くも來月末迄には其の運びに至るべけれど、兎に角わが決意は斷として動かざるつもり(中略)孤島も追筆陣を進め居り、空谷、花外、露葉の諸兄またチラ／＼文壇に片鱗をあらはし居り候やうなれど、疑ふらくは是れ未だ以て我同人の理想の百が一をも實現せざるものにあらざるか、此の際大兄の事業の経過と、將來の御抱負とも承知致度候。若夫れ大兄僕をして、更に旗を捲いて中央論壇の一隅に立たしめ、諸共に世と健闘するを得せしめば、幸何ぞ如かんや、快何ぞ如かんや。大兄望むらくは、われ戦に疲れたりといふが如きこと勿れ、僕はたゞ新しく得たるわが短劍長槍を振ひて、少くも一たびは世と大に相闘はんの心、物々として禁めがたき者に候。

果然君は教師に閉ぢて、詩人に開かんと決したりしなり。詩人に開いて、其の新に得たる短劍長槍を振つて、大に世と健闘奮戦せんと決したりし也。嗚呼これ何等の快事ぞ、何等の壯圖ぞ、われは實に之れを愛し、これを敬せざらんと欲するも能はざる也。

斯くて君愈意を決して古河を辭するや、直ちに京に上つて居を大久保余丁町に

〔三九八〕

トし、茲に漸く筆硯に親しむの身となり、君が多年蘊蓄の學識と、其の深大なる抱負とは、是れより當さに大に世に顯はれんとせり。『文學研究法』の一篇の如き、これ君が世に示せる處女作にして、實に此の際の所産兒なりし也。

斯くて日經ち月超え、此年も漸く暮に逼まりて、日露の風雲愈急ならんとするや、信長を生み、豊公を生み、加藤、福島等のあらゆる雄將猛卒を生みたる元龜、天正の尾州を理想したる君の志望は、更に成吉思汗、鐵木真など東洋に於ける所謂古豪傑の跡を究めつ、常に曰ふ、星や董は未だに以て日本文學を飾るに足らず、向後の詩人文學者は、須らく經國の士と共に、また眼を大陸に放たざるべからず。而して大陸的、若くは世界的眼光を以て、大陸的風光、若くは世界的人情の上に此筆振はざるべからず。島國的思想は最早今時に要なし、何を苦んでか蝸牛角上に遑々たるをせむ。日露の談判若し破るゝの日あらば、われは筆を擲つて戎劍に代へ、一死直ちに祖國の爲めに盡くさん哉と。意氣軒昂として四邊を壓するの慨ありしもの、今にして懷へば、これも悲しき追懷の一とぞなりける。

三十七年二月、日露の談判遂に破れて、開戦の幕いよ／＼こゝに開くや、君單へに

〔三九九〕

祖國の爲めを懷うて、日夜其の召集の令到る遲きを待てり。此の年三月六日、果然令あり、君奮然として翌日直ちに任に名古屋に赴き、隊にあること十有七日、去つて宇品に赴き、翌月二十日、錫蘭丸に塔して、遠く滿洲の野に向ひ、或は南山、或は得利寺、大戦小闘十有余合に渡つて、未だ負傷せずとは、當時君が唯一の誇りとせし所なりしに、思ひきや、七月二十四日、大石橋頭の夜襲に、奮戦突撃、遂に敵丸の爲めに倒る。時に歳二十有八。同月功を以て陸軍歩兵中尉に進み、功五級、金鵄勳章、年金三百圓及勳六等單光旭日章を賜はる、蓋しまた君が志にもあらざるべき乎。

是れより先き、君が召集の命を待つて未だ京にあるや、諸友一同萬世橋畔の一蕪亭に會し、君が爲めに征途の行を壯にし、また去つて礪川なる孤島の寓に到り、更に痛飲快談、夜半に及ぶ。歸途共に手を携へて飯田橋畔に到り、欄に凭つて共に人生を語る。四邊人なうして夜色轉た沈々たり。仰げば星斗欄干として、宛ながらに夜の默示をさゝめくかのやう。下には夜の江戸川靜かに流れて、其の聲切々、幽懷殆んどいふべからず。君曰く、死生元天なり、離別は常たり、我が意既に決し、わが心既に安んず。また何をか悲しみ、何をか嘆かむ。君乞ふ幸に安んせよと。余曰く、

〔四〇〇〕

詰、今に於てわれまた君の志望を疑ふものならんや。友よ乞ふ行け、行いて祖國の爲めに奮戦せよ。死は生なり、生は死なり、大觀すれば、有無また一ならずや、何をか嘆き、何をか悲しむをせむやと。即ち共に手を握つて別る。これよりまた君と人生を論せず、悲しからずや。

〔四〇一〕

此の年三月七日、諸友と共に君を送つて新橋に到り、共にビヤを舉げて君が征途の恙なきを祈り、尙凱旋の日の長からざらんことを約して別る。これよりまた君を見ず。うたてからずや。

七月盡日偶報あり、孤景大石橋の激戦に倒ると。われ未だこれを信せず。信せざるは事のあまりに意外なれば也。超えて數日、都下の新紙競ふて君の死を報ずるに及び、我が疑ひはまた保つ能はずなりぬ。而してわが胸は塞がり、わが情はせまりて、口言ふ能はず、手また書く能はず、神心茫乎たること數時、初めてわれに返れば、兩眼のうるみに袂沾ほすわれを見出したるも、うそならざりけり。

嗚呼二十有八年の短生涯、君の事業は實にこれよりぞ待ち得べかりしものを、祖國の爲めとはいへ、不幸中途にして倒る。悲嘆何を以てかよくこれに比せんや。

筆を擲つて窓外に出づれば、雲無心にして千代田城の彼方にかゝり、城裡吹き送る夕陽喇叭の音は、凄愴として人の心を傷ましむ。聊か記して手向とす矣。

明治三十八年七月二十四日君が一周忌に際して

辱知 西山筑溪識

〔四〇二〕

〔四〇三〕

從軍日誌摘要

- 從軍日誌摘要
- 一 明治三十七年三月六日第三師團充員令到達
 - 一 同三月七日東京出發
 - 一 同三月八日第三師團步兵第六聯隊編入第三大隊第九中隊
 - 一 同三月二十四日名古屋出發
 - 一 同三月二十六日朝廣島着滞在細工町六十四番邸武内慶助
 - 一 同四月二十日午前十一時五十分字品乗船同午後二時三十五分出帆錫蘭丸
 - 一 同四月二十三日大同江に停泊鎮南浦
 - 一 同五月四日鎮南浦出帆第二軍の先頭
 - 一 同五月五日正午十二時目的地大沙河の河口に上陸直に二分隊を引率徐家屯に前哨

- 一 同五月六日普蘭店占領
- 一 同五月廿四日金州攻撃

筆を擲つて窓外に出れば、雲無心にして千代田城の彼方にかゝり、城裡吹き送る夕陽喇叭の音は、凄愴として人の心を傷ましむ。聊か記して手向とす矣。

明治三十八年七月二十四日君が一周忌に際して

辱知 西山筑濱識

從軍日誌摘要

- 一 明治三十七年三月六日第三師團充員令到達
- 一 同三月七日東京出發
- 一 同三月八日第三師團歩兵第六聯隊編入第三大隊第九中隊
- 一 同三月二十四日名古屋出發
- 一 同三月二十六日朝廣島着滞在細工町六十四番邸武内慶助
- 一 同四月二十日午前十一時五十分字品乘船同午後二時三十五分出帆錫蘭丸
- 一 同四月二十三日大同江に停泊鎮南浦
- 一 同五月四日鎮南浦出帆第二軍の先頭
- 一 同五月五日正午十二時目的地大沙河の河口に上陸直に二分隊を引率徐家屯に前哨

- 一 同五月六日普蘭店占領
- 一 同五月廿四日金州攻撃

- 一同五月廿五日金州占領
- 一同五月二十六日南山攻撃眉子山東方正面より進撃
- 一同五月二十七日南山占領
- 一同五月二十八日真水屯高地を發しダルニーに至り民政廳委員護衛
- 一同五月二十九日前哨
- 一同五月三十日小平島方面小戦應援
- 一同六月二日金州及南山戦勝に對し 勅語拜聴
- 一同六月四日金州南關外を發す軍の先頭として東方に行進
- 一同六月六日思拉堡小戦
- 一同六月十三日總豫備隊となり起家屯出發
- 一同六月十四日夜半突然命あり得利寺に進撃
- 一同六月十五日得利寺占領
- 一同六月十六日老燒鍋に移り總豫備隊となる
- 一同六月十七日北瓦房店方面偵察

〔四〇四〕

〔四〇五〕

- 一同六月二十日山口少將指揮の下左側衛となり前進
- 一同六月二十一日熊岳城占領
- 一同六月二十六日塞子河北方高地防禦工事施行
- 一同六月二十七日熊岳城南門守備
- 一同六月二十八日今日より精米二合粟一合給せらる
- 一同七月四日正白旗に至り前哨
- 一同七月五日紅旗之將校斥候敵と衝突撃退す
- 一同七月六日思拉堡東北方高地に第五師團に應援敵を撃退す
- 一同七月七日聯隊長指揮の下に復歸午後三時鳳凰山方面偵察出發
- 一同七月八日夜半より前進蓋平に向ふ
- 一同七月九日高粱畑の露に満身を濡し前進徐家屯に至り天明第五師團は東方より攻撃敵を北方に撃退蓋平占領
- 一同七月十七日關家甫附近前哨
- 一同七月十八日老青山北方高地展望哨

一同七月二十日前
一同七月二十一日明午前四時前進を起すべき内命ありしも取消さる
一同七月二十二日

附

宗教と文學附録終

1/10/40

四〇六

明治三十八年八月廿一日印刷
明治三十八年八月廿四日發行

編輯者 坪内義衛

發行者 東京市本郷區四丁目五番地
清水金右衛門

印刷者 東京市神田區表神保町二番地
三島宇一郎



坪内義衛稿
價八拾錢

發行所

東京本郷四丁目五番地
(電話下谷三千二十九)

文明堂

一同七月二十日前
一同七月二十一日明午前四時前進を起すべき内命ありしも取消さる
一同七月二十二日

宗教と文學附録終

〔四〇六〕

110/40

明治三十八年八月廿一日印刷
明治三十八年八月廿四日發行

〔坪内孤塚遺稿〕
價八拾錢

編輯者 坪内義衛

發行者 東京市本郷區四丁目五番地
清水金右衛門

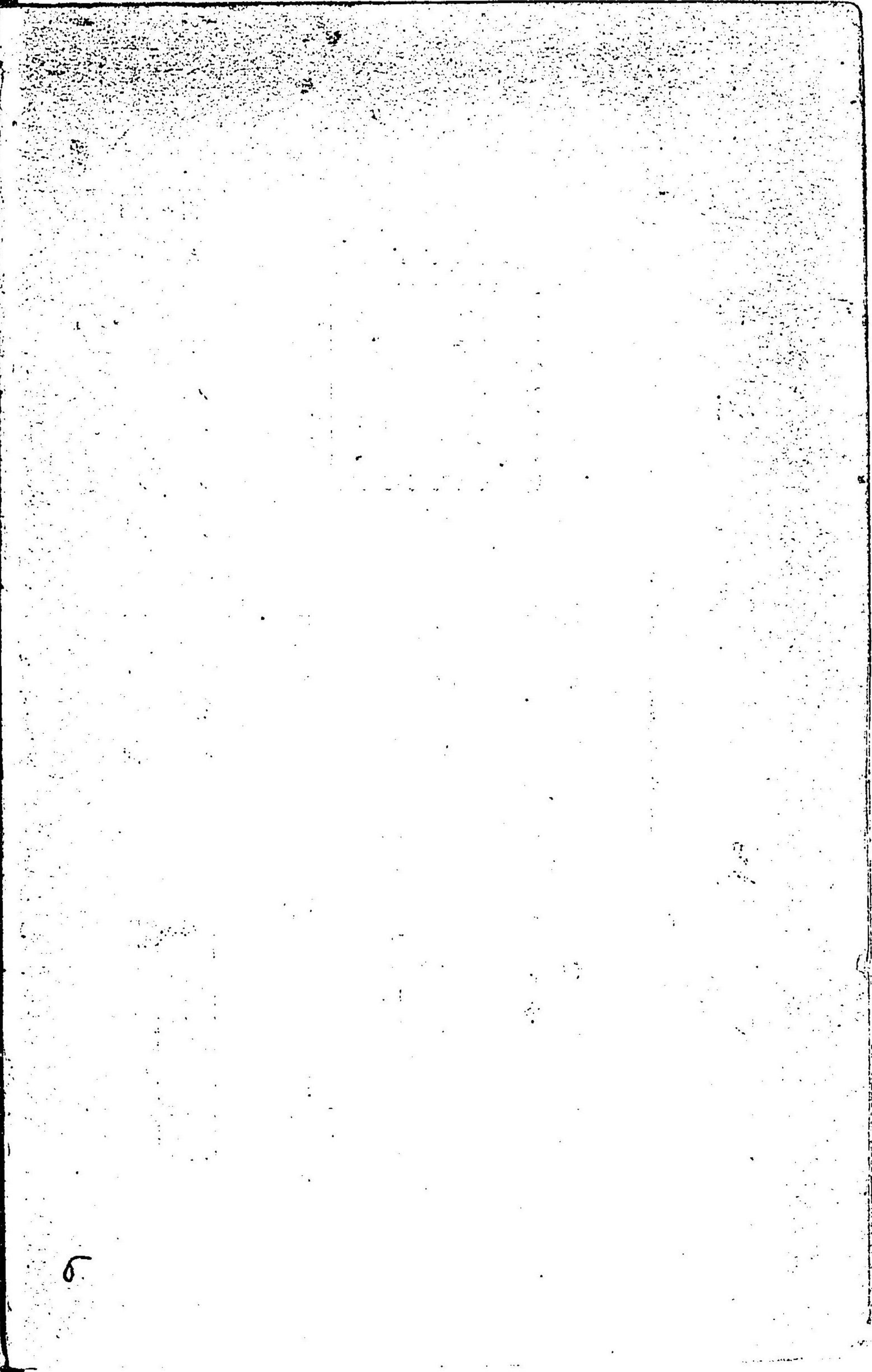
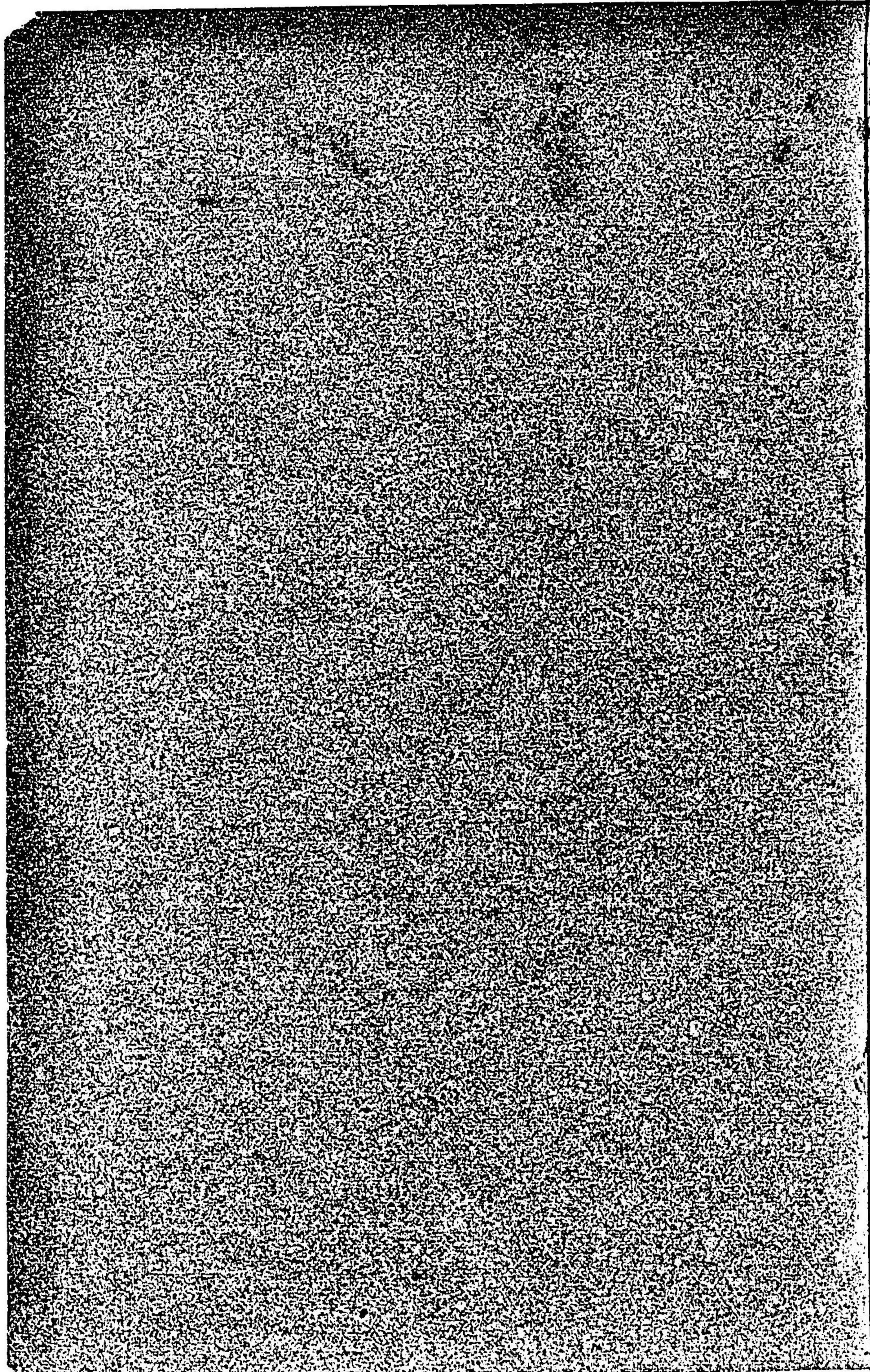
印刷者 東京市神田區表神保町二番地
三島宇一郎



發行所

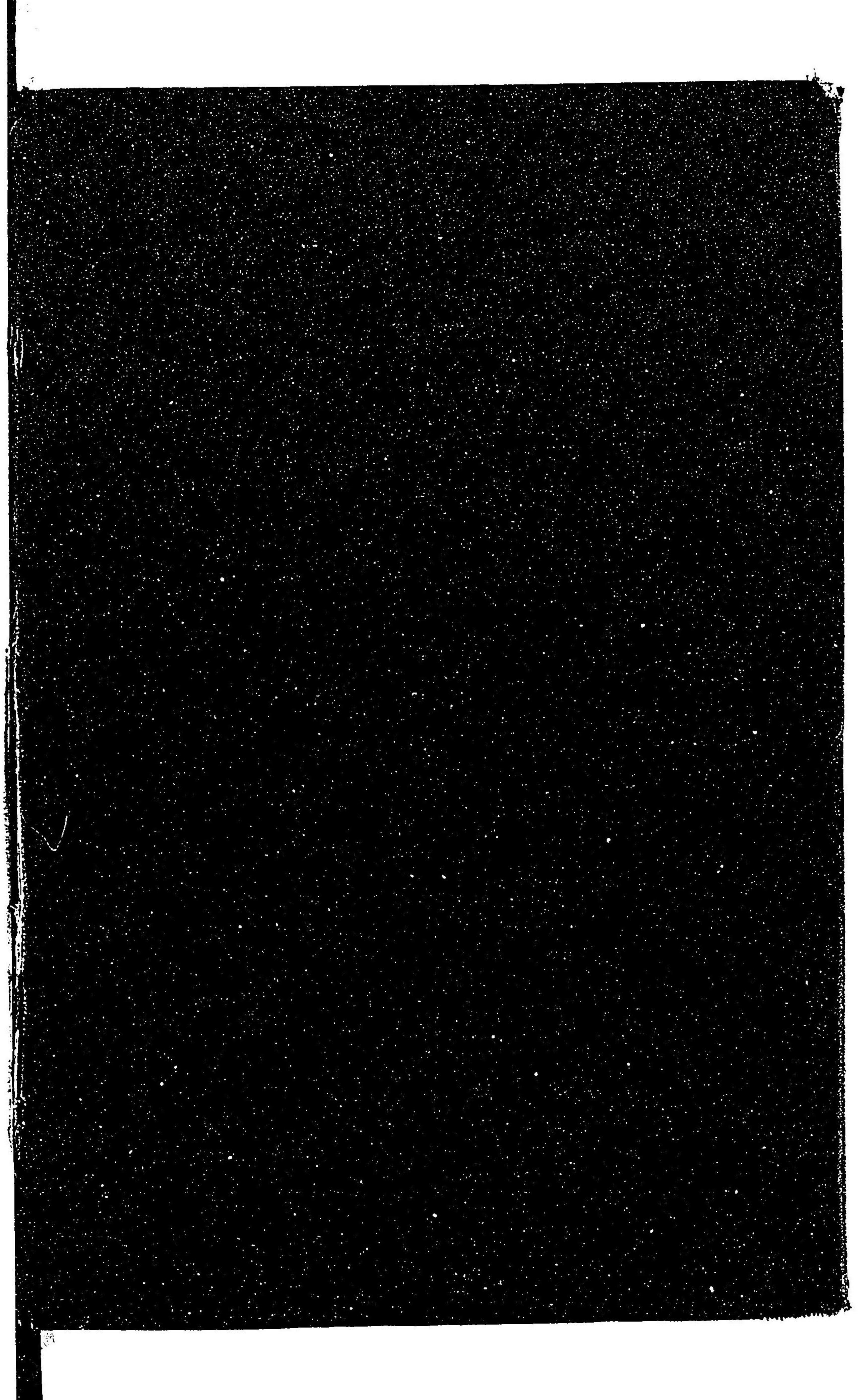
東京本郷四丁目五番地
(電話下谷三千二十九)

文明堂



6

99
134





013640-000-9

99-134

宗教と文学

坪内 鋭雄/著

M38

ABA-0109



